

発行：〒656-0011 兵庫県洲本市炬口1-3-19 東亜天文学会速報部
郵便振替口座：00980-8-189107 加入者名：東亜天文学会速報部 購読料1部130円

Published by the Department of Yamamoto Circular, Oriental Astronomical Association

Collaborating with the Computing and Minor Planet Sections

P. O. Box No.32, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-8691 JAPAN

e-Mail address: (Subscription) URL: <http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/yc.htm>

編集：中野 主一 ☎ 0799-22-3747 Fax: 23-1104 e-Mail address:

Editor: *Syuichi Nakano*, 3-19, Takenokuchi 1 Chome, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-0011 JAPAN

仮番号
LONEOS 周期彗星 201P/LONEOS (2001 R1 = 2008 Q4)

2009年8月に回帰が予定されていたこの彗星がオーストリアのジャガー (*M. Jaeger, Stixendorf*) によって、2008年8月31日に20-cm f/2.8反射を使用して検出された。検出時の光度は16.5等、彗星には、20"足らずのコマと西に広がった3'の尾が見られた。確認は、イタリアのソステロら (*G. Sostero, E. Guido & P. Camilleri*) によって、30-cm f/6.6反射を使用して9月1日に行なわれた。彼らによると、彗星の光度は、16等級後半であった。ドイツのメイヤー (*M. Meyer, Limburg*) は、NEATサーベイで撮影されていた2001年8月9日と14日のパロマーのフレーム上に、この彗星の姿を見つけた (CBET 1490, IAUC 8970)。上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) からも、この彗星の9月2日の観測が報告された。氏の CCD 全光度は、16.4等と予報光度と良くあっていた。検出位置は、予報軌道 (NK 870 (= HICQ 2007)) から赤経方向に+671", 赤緯方向に-64"のずれがあり、近日点通過の補正值にして、 $\Delta T = -0.43$ 日であった。

OAA 計算課では、2001年から2008年9月2日までに行なわれた130個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.79$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1673.htm>)。

T = 2008 Aug. 4.75852 TT	Epoch = 2008 Aug. 2.0 TT
$\omega = 24^\circ.96265$	e = 0.6116195
$\Omega = 35.30168$	a = 3.4631550 AU
i = 7.03254	n° = 0.152931226
q = 1.3450220 AU	P = 6.445 年

ガラッド新彗星 C/2008 R1 (Garradd)

ガラッド (*G. J. Garradd*) は、2008年9月2日にサイディング・スプリングの50-cm ウプサラ・シュミットでつる座を撮影した検索フレーム上の次の位置に18等級の新彗星を発見した。発見時、彗星には、北に流れた15"のコマがあった。発見同日にイタリアのソステロら (*G. Sostero, P. Camilleri & E. Guido, Remanzacco*) がオーストラリアにある35-cm f/6.7反射を遠隔操作して行なった観測では、彗星には北北東に伸びた8"のコマが見られた。また、ブラジルのジャッキーズら (*C. Jacques & E. Pimentel, Minas Gerais*) が30-cm f/3.0反射で行なった9月4日の観測では、彗星のコマの視直径は25"であった (IAUC 8969)。

2008 UT	α (2000)	δ	Mag.
Sept. 2.49906	21 ^h 41 ^m 12 ^s .73	-47° 47' 56".4	18.5

OAA 計算課では、2008年9月2日から4日までに行なわれた15個の観測から次の軌道を決定した。

T = 2008 Nov. 8.228 TT	$\omega = 338.046$	} (2000.0)
	$\Omega = 27.211$	
q = 1.66109 AU	i = 18.709	

ホームズ彗星 C/2008 N1 (Holmes)

山本速報No.2590でその発見を紹介したこの彗星は、その後の追跡観測から長円軌道を運行する彗星の1つであることがわかった (cf. YC 2590)。9月に入ってからこの彗星の核光度は、6日に18.8等 (シェロード; ASO)、8日に17.8等、11日に18.5等 (井狩康一; 守山) と観測されている。また、CCD全光度は、9日に18.4等 (浅見敦夫; 秦野) と報告されている。

OAA 計算課では、2008年7月1日から9月12日までに行なわれた284個の観測から次の軌道を決定した。

Epoch = 2009 Sept. 6.0 TT		
T = 2009 Sept. 25.8909 TT	$\omega = 100.8155$	(1/a) org. = +0.001135
e = 0.997173	$\Omega = 357.4722$	(1/a) fut. = +0.001194
q = 2.783563 AU	i = 115.5203	(Q = 5)

仮番号
スカッチ周期彗星 **202P/Scotti (2001 X2 = 1929 WW = 2008 R2)**

月惑星研究所のスカッチ (*J. V. Scotti, LPL*) は、2009年2月回帰予定のこの彗星を1.8-m f/2.7スペースウォッチII望遠鏡で2008年9月5日に検出した。検出時、彗星には、5"のコマと西に広がった0'.5の尾が見られた。この検出は、91-cm f/3.0スペースウォッチ望遠鏡で約1ヶ月前の8月7日に撮影されていた搜索フレーム上に確認された。さらに、約1年前の2007年9月13日と10月8日にレモン山で行なわれた搜索フレーム上にも、彗星の姿が確認された。このとき、彗星は21等級であった (IAUC 8971)。

これら2007年/2008年の検出は、この彗星と小惑星1929 WWとの同定 (NK 1070 (= YC 2431)) が正しいことを確認した。検出位置には、2001年の出現の軌道 (NK 879 (= MPC 56802)) から、赤経方向に+125", 赤緯方向に+22"のずれがあり、近日点通過時刻への補正值は、 $\Delta T = -0.15$ 日、1930年と2001年出現時の連結軌道 (NK 1070 (= YC 2431)) からは、それぞれ、+15", +3"のずれがあり、 $\Delta T = -0.015$ 日であった (cf. NK 879, NK 1070, YC 2431)。

OAA 計算課では、1929年から2008年までに行なわれた134個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.68$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1674.htm>)。なお、1929年観測時の近日点通過は、 $T = 1930$ 年1月8.74日TTであった。

T = 2009 Feb. 7.00621 TT	Epoch = 2009 Feb. 18.0 TT
$\omega = 255^\circ.55531$	e = 0.3308134
$\Omega = 194.58033$	a = 3.7763341 AU
i = 2.18494	n° = 0.134306941
q = 2.5270720 AU	P = 7.338 年

LINEAR 新彗星 **C/2008 R3 (LINEAR)**

LINEAR サーベイから2008年9月7日にヘルクレス座を撮影した搜索フレーム上の次の位置に発見された18等級の小惑星状天体が報告された。発見同日に40-cm f4.5反射でこの天体を観測したイタリアのペッタリン (*E. Pettarin, Farra d'Isonzo*) は、天体には、東南に20"の尾があることを観測した。米国のホームズ (*R. Holmes, Charleston*) による81-cm f/4.0アストログラフでの9月8日の観測でも、天体は、拡散状で13"のコマが見られた。また、イタリアのソステロラ (*P. Camilleri, G. Sostero & E. Guido*) がオーストラリアにある30-cm f/5.8反射を遠隔操作して行なった観測でも、彗星には約12"の楕円形のコマが見られるなど、多くの観測者から、天体は、彗星であることが報告された (IAUC 8973)。我が国でも、守山の井狩康一氏 (*Y. Ikari, Moriyama*) から、確認段階での観測が報告されたが、天体の形状はわからなかった。

2008 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Sept. 7.12889	18 ^h 26 ^m 29 ^s .39	+19°	10' 58".2	18.5

OAA 計算課では、2008年9月7日から9月15日までに行なわれた87個の観測から次の軌道を決定した。井狩氏による9月14日の核光度は17.5等であった。

T = 2008 Nov. 25.902 TT	$\omega = 88.288$ $\Omega = 268.925$ $i = 42.503$
q = 1.87682 AU	} (2000.0)

仮番号
コーレビック周期彗星 **203P/Korlevic (1997 WJ₇ = 2008 R4)**

2010年2月回帰予定のこの彗星がキットピークで2008年9月3日に91-cmスペースウォッチ望遠鏡でブレッシ (*T. H. Bressi*) によって撮影された CCD フレーム上に写っていた小惑星の観測群の中から小惑星センターで見つけられた。彗星の光度は20等級であった。同所のスカッチ (*J. V. Scotti*) は、9月9日に同望遠鏡でこの彗星の存在を確認した。このとき、彗星は、わずかに拡散状で南南西に0'.14の尾が見られた (IAUC 8974)。キットピークでの発見位置は、予報軌道 (NK 999) から赤経方向に+157", 赤緯方向に+72"のずれがあり、近日点通過時刻への補正值にして、 $\Delta T = -0.30$ 日であった。

OAA 計算課では、1999年から2008年までに行なわれた206個の観測から次の連結軌道を計算した。平均残差は $\pm 0''.71$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1675.htm>)。

T = 2010 Feb. 8.19822 TT	Epoch = 2010 Feb. 13.0 TT
$\omega = 154^\circ.54426$	e = 0.3151276
$\Omega = 290.56507$	a = 4.6463021 AU
i = 2.97583	n° = 0.098410834
q = 3.1821242 AU	P = 10.02 年